



【討論】

国際交流基金日本語国際センター所長
西原 鈴子 氏

【第2部】

○栗田 それでは、これより第2部を始めさせていただきます。第2部は第1部でのご講演をもとに、指定討論を行います。

まずは指定討論者の先生方をご紹介します。

向かって左から、立教大学副総長国際化推進機構長経営学部教授、山口和範先生。(拍手)

異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長、池田伸子先生。(拍手)

元国際大学大学院国際関係学研究科教授、田丸淑子先生。(拍手)

国際交流基金日本語国際センター所長、西原鈴子先生。(拍手)

国際基督教大学日本語教育課程、課程准教授、小澤伊久美先生。(拍手)

国連大学サステイナビリティ高等研究所客員教授/プログラム・アドバイザー、長尾眞文先生。(拍手)

コーディネーターは日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授、丸山千歌先生です。(拍手)

それでは丸山先生、よろしくお願いいたします。

○丸山 それでは第2部に入りたいと思います。第2部では先ほどの3つのご講演を基調にして、今度はコメンテーターの先生方からコメントを頂戴いたしたいと思います。先ほどご紹介がありました西原先生には、第1回のシンポジウムで、世界から見て、大学の日本語教育に期待することということを基調講演で示唆いただきました。本日は西原先生、国際交流基金で、世界で日本語教育を

展開するお立場からご覧になって、本日のこの3つの講演を通して、どのようなことをお考えになったかということをお話いただければと存じます。

また、本日の趣旨説明のところでプログラム評価に取り組んでいるお話をいただきましたが、実はこれ、科研の取り組みでもあります。科研の取り組みの中で、国際基督教大学の小澤先生に、外部の立場から、私たちの日本語プログラムのプログラム評価を見ていただいているということがございます。ですので、小澤先生には、そのお立場から本日の話についてコメントを頂戴できればと思います。

そして3人目の長尾先生には、昨年度のプログラム評価をテーマにしたシンポジウムでご講演いただきました。本日は、プログラム評価のご専門の立場から、大きな目で私たちこれからどういう方向に向かっていったらいいかということについて、ご示唆を頂戴できればというふうに思います。コメント、どうぞよろしくお願いいたします。

コメントですが、お1人10分ずつ頂戴いたしまして、それから全体の討論というふうに入ってまいりたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。

それでは西原先生、よろしくお願いいたします。

○西原 日本語教育の立場からのコメントというご指示に従って、スライドに挙げた四つのことについて、お三方のご発表を裏書きするような感じで申し上げたいと思います。一つは国としての課題と大学における日本語教育の役割ということです。先ほど山口先生もおっしゃいましたが、今日本は人口減少社会を迎えていて、生産年齢人口がどんどん減っていくことを経験しているわけです。その対策として、女性が輝く、1億総活躍、ロボットで生産性を高めるというスローガンが掲げられていますが、そのほかに、海外からの人材を招致することが重要課題になっていると思います。

生産年齢人口を増やすという目標の中に、海外から人材を導入することも重要なポイントになっています。文部科学省主導の留学生受け入れ30万人計画も、経済産業省主導のグローバル人材育成事業も多額の予算を投入して、留学生たちが卒業後、日本に適応し、滞在して、単にお客様としてではなく、生産年齢人口として中核的な社会をつくる人材になってもらいたいという目論見があるのです。大学の日本語教育者は、そのために基本的な働きをする責務を負っているのだと思います。

日本の企業は、優秀な人材に日本で働いてもらいたいし、その優秀な人材が、

単に日本ということではなく、海外進出するその先でも働いてほしいと思っているわけなので、日本語ができさえすればよいというわけではないと知っていると思うんですけども、統計を取って見ますと、JASSO の調査によると 56% の企業が、日本語ができなければ雇用しないと言っているという現実もあるわけなんです。そうしますと、大学の日本語教育に期待されることは、大学で授業を受けて、卒業できるだけの日本語力獲得ということにとどまらず、日本社会の中で中核的に働けるような人を育てるというという出口戦略としての責任を負っていると思うんです。

先ほど、留学生センターはちょっと中途半端なところだというお話がありましたが、留学生センターの役割は、基本的には、学内で研究または学術行為ができるように予備教育をするということで、その後のことには責任を負っていないということです。しかしこれからは、卒業後どういう人材として、どういう人的リソースとして社会に出ていくかということまで、日本語教育の守備範囲になるのではないのでしょうか。そのためには、社会が要求する能力を持って社会に出ることを視野にいたカリキュラムを構築できるかという点も評価の対象になるだろうと思うわけです。

次に、評価の発信先です。先ほど、池田先生及び山口先生からお話があったけれども、発信先をどう選んで、どういうふうに評価の結果を広報していくかということは、大学の存続に関わる本当に重要なことだと思います。これは日本語教育だけの話ではないのはもちろんです。

先ほど、立教大学がスーパーグローバル大学に選ばれたというご報告がありました、私はたまたま、もう 1 つのカテゴリーの審査をする立場にあったんですけど、文部科学省の魂胆は明らかだと思いました。大学を淘汰しようとしています。採択したので頑張ってくださいということと同時に、競争してください。残るところは残るでしょう、落ちるところは落ちるでしょう、どうぞという、そういう時代になってきていると思うのです。だからプログラム評価の結果は、しかるべきところにきちんと発信して、大学がきちんと仕事をしていることを認めてもらうための重要な武器というふうに考えるのだと思います。

そして三番目のポイントですけども、先ほど、海外から授業料を払って来てくれる学生を増やさなければ、大学として経営が苦しくなるというお話がありました。留学生が増えていくということだけでなく、優秀な学生が来てくれるかどうか

かは、今の教育がどうあるかを、正しく評価された結果として、客観的な広報資料として出ていくということが非常に大切なことにかかっていると思います。評価をすること、その結果を出すこと、その結果をどういうふうに利用するかということが、優秀な学生を立教に集めるということの重要な要因になると思いました。

最後に教員の評価という項目を挙げました。大学に就職しようとした経験のある方はご存じですが、大学で教員を採用しようとする場合、実際には研究業績だけが問題になります。どのくらい論文を書いたか、何冊本を書いたか、それがどのくらい引用されたかというように、研究業績だけが評価されて、教育実践の業績は通常は評価されないんですね。

でもそれは間違っていると思います。プログラム評価の中に教員の実践的能力の評価もぜひ入れていただきたいのです。少し前に、私はあるアメリカの友人の履歴書を見たんですけれども、三つの項目が評価の対象として履歴書に書かれていることが分かりました。一つは研究、次は教育実践です。自分はどんな科目を教えて、どれだけのいい学生を世の中に送り出してきたかということが履歴書に書かれているという、そういう意味での教育実践の評価です。そして学生からこういう評判を得ているということも書いてありました。三つめは社会貢献で、自分は大学人として、地域社会、あるいはもう少し広域な社会にどういう貢献をしてきたかということが、教育者としての個人の評価として、きちんと履歴書の中に入っていました。それを見て圧倒されたというか、ここまで来ているのだと思いました。そういうことも含めてのプログラム評価を、これからは期待したいと思いました。【スライド④-1】

【スライド④-1】

西原コメント

- 国の課題と大学の日本語教育の役割：
 優秀な生産年齢人口
 出口戦略
- 評価の発信先
- 大学広報
- 教員評価